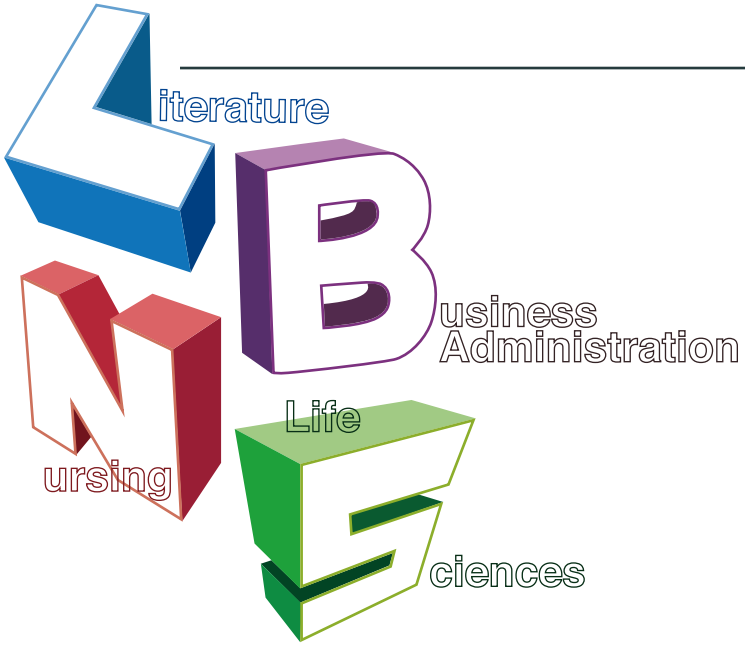
IC茨城キリスト教大学
IBARAKI CHRISTIAN UNIVERSITY

学術研究センター
Newsletter
Vol. 7
2019



目次

1．　ニュースライン
2．　学長挨拶
3．　学術研究センター長 所感
4．　大学院研究科報告
7．　研究業績出版助成
8．　プロジェクト研究助成
9．　ICコロキアム報告
10．　研究倫理教育について
　　学術研究センター、この１年

ニュースライン

● 2019年度「ICコロキアム」開催報告

最新の研究や教育成果を発表し、本学の多様な専門領域の教員で共有、互いの専門知識を高め合うことを目的に開催しているICコロキアム。今回は、最終年度を迎えたプロジェクト研究(重点課題研究：３年間)の成果報告を看護学部、栗原加代先生ほか３名の先生から、さらに心理福祉学科、國見充展先生より、これまでの研究紹介と現在の研究活動についてご発表頂きました。短時間でしたが、活発な質疑・応答もあり、盛況のうちに無事、終えることができました。

●書評「江戸初期の香文化 堀口悟共著」

２019年度の学術研究センター・研究業績助成を受け、堀口悟先生(文学部・文化交流学科・教授)の書籍が出版されました。本書は、江戸時代初期、新しい香文化が創り上げられていくその様子をとらえなおした書籍であり、未開拓であった江戸時代初期の香文化事情解明のための重要な資料として期待されています。書評を本学名誉教授の森謙二先生にお願いしました。堀口先生の研究について、その深さを伺い知ることができます。

●プロジェクト研究助成

２018～2019年度学術研究センター・プロジェクト研究(自由課題研究・２年間)：渋谷えみ先生(看護学部・看護学科)からの成果報告を掲載しました。

学長
挨拶

本学の学術研究の現状と課題

学長　東海林宏司

2019年度は、茨城キリスト教学園第14期中期経営計画、いわゆる５か年計画の４年目にあたる年でした。同計画の大学マスタープランの１つである「研究の活性化」の実現に向けて、学術研究センターは着実に具体的施策を実行してきたと言えるでしょう。科研費獲得等に向けた様々な施策は、徐々に成果が出てきています。その一方で、教員の業務過多が学術研究にも影響を及ぼしているとの声も消えたわけではありません。私も学長として、これまで業務の効率化に向けて努力してきたつもりですが、力が及ばなかった点については反省しています。

幸いなことに、望ましい教育研究の前提となる大学・学園の経営基盤については、ここ数年は、安泰とは言い切れないものの、まずまず安定していると言えるでしょう。これは一人ひとりの教職員の努力の成果であり、皆様に心から感謝したいと思います。学園創立70周年・大学創立50周年を機に設けられた寄附金制度は、周年事業終了後も継続していくこととなり、その一部が学術研究にも活用されることが期待されます。

その上で、これから本学として真剣に考えていくべきことは、本学でどのような資格が取れ、どのような就職ができるかといった従来の「18歳ターゲット」の広報に加えて、本学でどのような特色ある学術研究が行われており、その成果がどのように社会貢献につながる可能性があるかという「社会ターゲット」の広報ではないかと感じています。正直言って、後者については本学の現状は不十分であると言わざるを得ません。学術研究センターでは、学園祭時の本学における学術研究のポスター発表などを実施していますが、ホームページやその他の広報媒体を通じて、社会へのアピールを更に強化していく必要があると思います。これは学術研究センターのみで実現できることではなく、教職員の意識改革や、学内の体制づくりを進めることが前提となります。本学の学術研究について「社会ターゲット」の広報を強化していくことにより、地域社会における本学の存在感と信頼度を高めることが期待できます。「地域社会や国際社会とつながり続ける」ということをモットーとしてきた本学にとって、必ず取り組まなければならない課題であると認識しています。

もう１つの課題として挙げることができるのは、学生、特に学部生に対する、個人情報保護を含む研究倫理教育です。学生が卒業研究などの課題に取り組む上で、研究倫理の面で最低限の常識を身につけておかないと、学生自身が不利益を被る可能性があるばかりでなく、学外の個人・団体にも迷惑をかけてしまう危険性があります。教員や大学院生に対する研究倫理教育はここ数年、定期的に実施されており、意識の向上もなされていると感じていますが、学部生に対してはこの点、十分とは言えないのが現状です。同じ学生でも、学部生に対しては、対大学院生とは異なるアプローチ、すなわち、「やさしく、わかりやすい言葉」で研究倫理教育を実施する必要があると思います。この課題には、学術研究センターばかりでなく、大学教員全体で取り組む必要があります。

この３月で学長任期満了を迎える私にとって、上記２点については問題提起に留まってしまうことには忸怩たる思いがあります。この点、お詫びしつつ、次期執行部に継続検討、対応をお願いしたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

（しょうじ・ひろし：文学部現代英語学科・教授）

研究活動活性化への支援を考える

学術研究センター長所感

学術研究センター長　梶田泰孝

日頃より学術研究センターの活動にご理解とご協力を頂き、感謝申し上げます。学術研究センターは、学内における研究活動の支援・活性化を目的とし、外部資金獲得に向けた支援や各種研究費の管理、研究助成制度の整備、さらには研究機関として必須とされる研究倫理の教育や情報提供など、さまざまな業務を担当しています。近年は、研究支援よりも研究倫理・生命倫理、そして個人情報保護法といったガイドライン対応に係る業務が増えています。

最初に2019年度の研究活動について報告致します。2019年度の日本学術振興会科学研究費助成事業（以下、科研費）への応募および採択の状況、ならびにセンターの研究助成については右をご覧ください。ここ数年、科研費の制度は、改革が進んでおり、審査区分の見直しや審査方法が変更され、審査委員が多角的に幅広い視点から申請内容を評価するようになりました。さらに区分によっては、他の審査委員の評価を考慮し、自身の評価結果を再検討できるといった審査方式に変わっています。先生方が行っている独自性の高い研究、興味深く、是非とも進展させるべき研究分野であることは都度感じますが、このような変更に対応するためには、研究内容を審査委員により適格に伝える工夫が必要であることを感じます。先生方の研究への思いが、審査委員に届くよう、学術研究センターとして出来るかぎりのサポートを致します。近年は、研究者とともに研究活動を効果的・効率的に進めていく研究支援業務を行うスタッフ（URA：University Research Administrator）が配置される大学が徐々に増えています。現状、難しいことは承知していますが、このような方がセンターに１名でも配置できればと思うこともあります。

○科研費応募・採択状況【日本学術振興会】
応募総数：10件
採択数　：２件（文学部：１件、看護学部：１件）
（継続研究：９件）
○学内研究助成【学術研究センター研究推進経費】
・プロジェクト研究〔重点課題研究〕：採択１件、
〔自由課題研究（個人）〕：採択１件、〔奨励研究〕：採択１件
・学術出版助成：採択１件
・国際学術成果発表助成：採択１件
・教育職員研修（2021年度予定）：採択１件〔長期・国外〕

科研費に関するもうひとつの動きとして、国の研究力向上を目指し、若手＊1研究者のより大規模研究への挑戦と、熟練した研究者のチームに若手研究者を巻きこみ、新たなる形にチャレンジする制度が設けられています。これらは、国を挙げて、若手研究者の研究力養成を推進していると感じます（※１：若手という表現は年齢ではなく、学位取得後の年数で分類されています）。もちろん熟練研究者の方々を排除するものではありませんが、これまで継続して科研費を受給されていた方々も安穏としていられない状況とのこと。今後はこのような流れが強くなっていくと思われます。

学内の研究助成については、学術論文雑誌投稿費用やその作成時の校閲費の助成、国際学術成果発表に係る費用の助成など、各種助成制度が整っています。また本学における研究活動の推進と成果の速やかな公開を目的として、「研究シリーズ」を発行しています。是非皆様に活用いただければと思います。

学術研究センター長として、はや４年が経過致しました。学術研究センターを管轄する立場として、この４年間、何が達成でき、何が成せていないのか、考えます。個人研究費や科研費の管理業務、さらにはガイドラインにあわせたルール作成など、様々な対応に追われ、本来であれば主となるべき研究支援業務に重心を置けないなど、思うことが実施できない苛立たしさも感じます。自分に対する評価と見直しを行い、次年度に繋げられればと考えます。皆様にはご不便をおかけすることもありますが、ご理解を頂ければ幸いです。

（かじた・やすたか：生活科学部食物健康科学科・教授）

大学院研究科報告

文 学 研 究 科

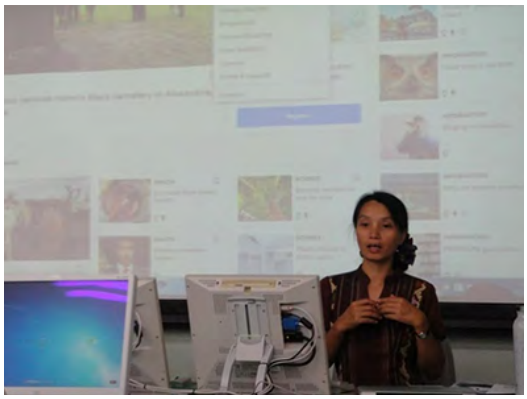
文学研究科長　上　野　尚　美

大学院文学研究科は、2020年度から大きく変わります。2019年度までは、教育学専攻と英語英米文学専攻の２専攻体制でしたが、2020年度からは、教育学専攻は募集を停止し、英語英米文学専攻の１専攻のみとなります。英語英米文学専攻では、従来通り研究者や教育者を養成することに変わりはありませんが、さらに、大学院レベルで「英語コミュニケーション」能力を高めることを目的に入学する学生の希望にも対応できるようなカリキュラムの改定、およびこれまで推奨していた海外留学プログラム(派遣)に加えて、海外からの留学生を積極的に受け入れられるように、グローバル志向での改革も検討しております。

2019年度は、教育学専攻において、木名瀬公実子が修了します。「ヤングケアラーの生活実態とケア役割に関する認識－大学生を対象とした質問紙および面接調査をもとに－」と題する修士論文を提出しました。

英語英米文学専攻では、2019年８月23日(金)ならびに24日(土)の２日間、ハーン・ティ・グエン教授(ハワイ・パシフィック大学)を講師に招き、第３回大学院 Special Lecture Series の特別講義を実施しました。講義全体のタイトルは「コンテクストをふまえた英語運用能力の開発」で、４つのワークショップから構成され、それぞれ「対話における会話力の開発」、「対話における文法」、「言語とコンテクスト、オンラインコーパスの利用」、「オンライン教材を用いたコンテクスト重視の会話練習」という題のもとに、言語運用におけるコンテクスト(話し手同士の関係性や状況)の重要性、単語や表現の意味がコンテクストに大きく依存する事実が強調されました。言葉の意味は固定的なものであると思い込みがちですが、実際は話し手たちを包みこむコンテクストによってさまざまに変化します。豊富な会話サンプルを用いてグエン教授はその事実を示し、今後の英語学習のあり方を語りました。講義はすべて英語で行われ、受講生も英語で演習に参加し、活発な議論を行いました。

また、英語英米文学専攻において、2019年度は尾形英人と宮崎明美の２名が修了します。尾形は「英語学習の動機づけについて」と題し、英語学習における動機づけの役割とその可能性に関する研究で修士論文をまとめました。宮崎は教材開発に関する研究を進め、「児童の意欲を高める授業の工夫―児童の主体的な学びを基本とする導入や教材の与え方」と題する修士論文を提出しました。



本専攻教員の今年度における活動は以下の通りです。英語教育専門の上野は、ハワイ大学英語教員研修プログラムの実施と研究紀要への投稿を行い、村上は、「フォーカス・オン・フォーム」の学習法に関する研究発表を海外ならびに国内の学術会議において行うとともに、英語教育の専門誌にエッセイも寄稿しました。英語学専門の三上は、英語発音表記学会において「最適性理論とレベルの分離」と題する研究発表を行い、応用英語学専門の東海林は、コーパス言語学の手法を用いて英語の語彙やコロケーションの分析、語用論や談話分析に取り組んでいます。言語学専門の三輪は、日本英語学会の紀要に「素性の上方志向の継承と残余」と題する研究論文を寄稿し、社会言語学専門のジャブコは、『日本語・ウクライナ語社会言語学辞典』を編纂し出版しました。イギリス文学専門の唐戸は、「英文科におけるテクストとコンテクストの力学」と題するエッセイを大学紀要(立教大学)に寄稿しました。

最後に、新しい試みとして、2019年度までハワイ大学で実施していた英語(教員)研修プログラムを、2020年度からハワイ・パシフィック大学(以下、HPU)で実施することになったことをご報告します。HPUは、英語教育学の分野において、実践的な指導法と体験を重視した教育で高い評価を受けている大学で、これまでハワイ大学で実施してきた中学校・高等学校の英語教員および同校種志望学生対象のプログラム(プログラムA)をさらに充実させ、2020年度から教科として導入される小学校の英語指導にも対応できるように、小学校教員および同校種志望学生対象のプログラム(プログラムB)も実施します。これまで通り、プログラムAに参加し修了証を授与された参加者が英語英米文学専攻に入学した場合、修了要件の単位(２単位)として認定されます。また、本研究科に在学中HPUに留学し、所定の単位を修得した場合、英語教育学の修了証書が取得できる制度も新設されました。HPUは、本学の提携校であることから、授業料も減額されます。詳細については、お問い合わせください。

(文責 文学研究科長 上野尚美、
英語英米文学専攻 唐戸信嘉)

(うえの・なおみ：文学部現代英語学科・教授)

生活科学研究科食物健康科学専攻

生活科学研究科長　飯　島　健　志

本学大学院生活科学研究科食物健康科学専攻は、これまで11名が修了、修士号(食物健康科学)を取得し、一般企業、公務員および学校教諭など各方面で活躍しております。以下、2019年度の研究活動について報告します。

【研究テーマ】

当研究科では、スポーツと栄養との関係、栄養代謝、病態栄養、食品の機能性に関する研究など、多岐にわたっています。以下に当研究科の主な研究テーマを紹介します。

・スポーツ時の代謝応答と運動能力の関係性(中村研究室)
・生活習慣病予防と健康増進に関する研究(桐井研究室)
・生体マグネシウム不足時の栄養代謝変動の解明(梶田研究室)
・ヒト褐色脂肪の機能等に関する研究(会田研究室)
・時空間の情報処理様式と運動制御に関わるヒト大脳生理学的研究（鯨井研究室)
・ヒトの栄養代謝・抗酸化代謝に関わる研究(坂倉研究室)
・慢性腎臓病患者の栄養指導効果に関する研究(石川研究室)
・細菌のコロニー形成、納豆菌の特性と分離・実用化(熊田研究室)
・食品の嗜好性と機能性に関する研究(大貫研究室)
・食品中のビタミンCに関する研究(飯島研究室)

【研究成果】

2019年度の教員、在学生、修了生の研究報告について紹介します。

(１)学術論文

・フルマラソンの平均走速度と漸増負荷走時の血糖値の上昇量との関係性．中村和照，仙石泰雄，白井祐介，鍋倉賢治．トレーニング科学．31，85－92，2019年
・長距離走のパフォーマンスと漸増負荷走時の血糖値の動態との関連性－男性市民ランナー１名の縦断的な検討－．中村和照，鍋倉賢治．ランニング学研究．30，243－259，2019年
・トレイルランニングレース参加者の水分摂取量が脱水率に与える影響．中村和照，半田佑之介．ランニング学研究(2019年12月採択)

(２)学会発表

・冷涼環境下におけるトレイルランニングレース時の脱水率を高くする要因について．中村和照，半田佑之介．日本スポーツ栄養学会第６回大会．2019年８月
・トレイルランニングレース時の上昇区間と下降区間の心拍数の推移について．中村和照．日本体育学会 第70回大会．2019年９月
・17kmのトレイルレース時の脱水率とパフォーマンスとの関係性．中村和照，半田佑之介．第74回 日本体力医学会大会．2019年９月
・無毒フグ(養殖)から異なる温度で抽出された肝油の特性．大貫和恵，岡本朋花，田中宏枝，飛田香菜美，五百藏良，野口玉雄．日本調理科学会2019年度大会．2019年８月
・当院における糖尿病透析予防指導の効果．鈴木薫子，名和礼子，大和田美穂，水野啓子，玉村浩美，石川祐一，鴨志田敏郎，植田敦志．第23回日本病態栄養学会学術集会．2020年１月
・透析患者のPEW改善を目指して－栄養状態と体力の関連－．鈴木薫子，佐々木武人，森永美智子，石川祐一，植田敦志．第10回腎臓リハビリテーション学会－ジョイントシンポジウム１”日本腎栄養代謝研究会”．2020年２月

(2018年度修了生)

・栄養教諭・学校栄養職員の勤務年数の違いが食に関する指導の実施状況に与える影響．中村良美，中村和照．第66回日本栄養改善学会．2019年９月

ここで、当研究科指導教員のもと行っている在学生の研究について紹介します。

大貫研究室では、「無毒フグ(養殖)から異なる温度で抽出された肝油の特性」のテーマで以下の学会発表を行った。

フグ肝の栄養補助食品(サプリメント)としての利用を視野に入れ、機能性脂肪酸を多く含むフグ肝から油分を抽出し、その特性を検討した。抽出温度が異なる４種の肝油(冷凍処理、冷蔵処理、60℃処理、100℃処理)は、歩留りが約60％、n-３系脂肪酸が約35％を示し、特に、DHA、DPA、IPAが豊富に含まれていた。色は、抽出温度が上昇するにつれて黄色が明るく鮮やかになり、酸価・過酸化物価は、すべて低値から、食用油脂としての品質に問題ない値を示した。

日本調理科学会においてポスター発表

石川研究室では、「慢性腎臓病患者の栄養状態、食事摂取量と生活の質との関係に関する研究」のテーマで以下の研究を進めている。

慢性腎臓病(CKD)患者に対する食事療法はたんぱく質、食塩の制限が基本である。しかし超高齢社会を迎え、低栄養予防やフレイル予防の重要性が示されている。そこで本研究では体組成測定、血液検査結果からCKD患者に対する適切な食事療法のあり方について検討する。また、栄養状態の低下とQOLには深い関連があるとの報告があり本研究においてCKD患者の栄養状態とQOLとの関連を明らかにすることで、栄養管理及び栄養指導の充実に寄与できるものと考える。

（いいじま・たけし：生活科学部食物健康科学科・教授）

看 護 学 研 究 科

看護学研究科長　山　本　眞千子

大学院看護学研究科を2011年４月に設置して、２期研究科長を務め、５年ぶりにピンチヒッターとして、研究科運営に戻ったのが、この2019年度でした。設置当初は、基礎看護科学分野に基盤実証看護学領域を、実践看護学分野に生活支援看護学領域、発達支援看護学領域、精神看護学領域を置き、また、唯一のCNS（Certified Nurse Specialist）コースとして慢性看護の高度実践看護師教育課程を置いてスタートしました。現在、茨城県における看護系大学は５校で、本学は唯一、県北地域にあり、私学では研究科を有する唯一の大学です。従って、この地域の看護アカデミズムの発展に寄与することが期待されていると自負しているところです。また本研究科は設置以来、地域における医療関連施設、看護職者から研究科に対するニーズを聴取しながら、基礎看護科学分野に看護管理学領域、看護教育学領域を設置しました。さらに、本年度は慢性看護の高度実践看護師教育課程更新申請、クリティカルケア看護の高度実践看護師教育課程新設申請を行い、2020年度にはCNSコースが２コースになる予定です。

【活動報告】

１）2019年度看護学研究科在学生

１年次生：４名　２年次生：６名　３年次生：１名

2019年度は５名の修了生を予定しています。

（研究テーマは下表）

基礎看護科学分野：看護教育学領域	看護学生の臨地実習における先延ばし行動に関連する要因の検討
基礎看護科学分野：看護管理学領域	認定看護管理者の承認行為に影響を与える要因
実践看護学分野：生活支援看護学領域 慢性看護CNSコース	糖尿病足病変重症化予防（フットケア）のためのセルフケア影響要因確認シートの開発
基礎看護科学分野：基盤実証看護学領域	慢性心不全患者における末梢冷感の生理学的メカニズムに関する基礎的研究
基礎看護科学分野：基盤実証看護学領域	冷え症の生理学的メカニズムについて ―健常成人男女の熱産生と自律神経活動による検討―

２）研究成果

①研究科教員、在学生、修了生の国際学会発表

・Kentaro Kaneko, Shin-ichi Sekizawa, Ryota Tochinai, Machiko Yamamoto, Masayoshi Kuwahara：Can slow breathing exercise improve the autonomic nervous imbalance in chronic kidney patients? 46th International Congress of Electrocardiology, Belgrade, Serbia

・C. Hatozaki, H.Sakuramoto, M.Okamoto, H.Nakajima, N. Shimojo, Y. Inoue：Quality improvement projects for time to antibiotics of septic patient's in the emergency department European Society of Intensive Care Medicine 32nd Annual Congress, Berlin, Germany

・Akemi Matsuzawa, Yuko Shiroki, Junichi Arai, Akemi Hirasawa：Health-related quality of life and healthcare utilization of Japanese parents raising children with medical complexity, 14th International Family Nursing Conference, Washington, DC, USA

・Akemi Matsuzawa, Yuka Masaki, Yasuko Torimoto：Mothers' child-rearing values and research methodology in Japan：A literature review, 14th International Family Nursing Conference, Washington, DC, USA

②下記学会誌、紀要に論文採択及び掲載予定（教員業績参照）

看護科学学会誌・看護技術学会誌・国際学会誌・茨城キリスト教大学看護学部紀要ほか

３）本年度における研究科教員の科研費取得（代表者）状況

・若手研究（Ａ）：SBEによる慢性疾患患者の副交感神経活動リザーブ増大の実現（金子健太郎）

・基盤研究（Ｃ）：慢性疾患患者における副交感神経活動リザーブを高める積極的看護介入の確立（山本眞千子）

・基盤研究（Ｃ）：熟練看護師の視線計測を用いた高齢患者の転倒防止のための移動援助モデルの構築（辻　容子）

・基盤研究（Ｃ）：医療ニーズのある子どもの親の子育て観に基づくケア・サービスモデルの開発（松澤明美）

・基盤研究（Ｃ）：集中治療患者の客観的呼吸困難感と長期予後との関連性に関する前向き観察研究（櫻本秀明）

・若手研究（Ｂ）：快・不快情動における脳の賦活化状態の可視化（廣瀬美和）

・若手研究（Ｂ）：重症呼吸不全患者に対する安全で効果的な気道クリアランス方法に関する検討（櫻本秀明）

４）本年度看護学研究科ＦＤ研修講演会

・日時：2020年１月31日（金）17：00－19：00

・講　師：對東俊介氏（広島大学病院診療支援部リハビリテーション部門）

・テーマ：「実践的メタ分析入門：メタ分析の概要～実践導入まで」

本研究科も2020年度は10年目をむかえます。本年度５名の修了生を送りだすこととなりますが、すでに３名の入学を予定しております。おかげ様で志願者は高度実践看護師教育課程を希望する者が増えています。看護学研究科は、より専門的な知識と技術を身につけ、倫理的な判断力や高度な実践力を学べる研究教育環境が求められます。従って、常に高い志と目標を掲げ、社会の速い変化に柔軟な対応ができるよう、私ども教員は日々、研鑽を重ねる必要があると思っております。また、2019年度は文科省の補助金が獲得でき、「シミュレーションセンター」を設置することができましたので、学部における実践力の学びに留まらず、高度な実践力を学べる研究教育環境が整い、新たな教育研究プログラムの開発が可能となりました。いよいよ学部から大学院へ繋がり、そして地域社会、さらに世界へ繋がるよう研究科としていっそうの質向上に努めて頂きたいと思っております。

（やまもと・まちこ：看護学部看護学科・教授）

研究業績出版助成

書評　『江戸初期の香文化 ― 香がつなぐ文化ネットワーク』

堀口　悟・鈴木健夫・村田真知子 著

名誉教授　森　謙二

私が、本書の評者としてふさわしいとは思わない。ただ、まだ大学院生の時代に茶道の家元制度に関心を持っていたこと、当時家元研究の第一人者であった西山松之助の著作を通じて香道にも若干の知識があったので、著者堀口悟氏の一連の研究にも関心を持っていた。

私は、日本の伝統的な文化＝芸道は「型」の文化であり、この「型」の成立のなかで家元制が成立し、この「型」の伝承として日本文化が継承されるようになったと考えている。この理解の背景には、家元制が、概ね江戸時代十八世紀前後、免許発行の形式が西山のいう免許皆伝による「完全相伝形式」から、家元が免許発行権を独占して不完全相伝形式へとの変化し、「元禄文化」を経て芸道が町民階層に浸透・定着するなかで成立したというものである。おそらく香道もその例外ではないだろう。

しかし、本書が対象とした時代は、下克上が一段落して幕藩体制も安定期にさしかかる林屋辰三郎のいう「寛永文化期」と一致する。著者はこれを「後水尾院文化圏」として捉えているようであるが、まさに安土・桃山文化を継承しながらも、「元禄文化」の橋渡しになる時代である。本書は、家元制が確立する直前の「寛永文化期」の香道の展開である。

堀口氏の主張は、「江戸初期に於いて、(略)・・・一木炷文化はむしろ武家から貴族へと向かうベクトルをも持っていた」というものである。そして、「水戸藩初代藩主である徳川頼房が、後水尾天皇に献上した香書《頼房香書》(堀口はこれを「一木炷や組香の作法・本旨を説いた、いわば“香道の教科書”」とする［25頁］)と、二代光圀が後西天皇に献上した『五月雨之記』」(鈴木はこれを「一木炷文化である「香合」を紹介する」とある［315頁］)とを念頭において、水戸市立博物館に現存している香書をご紹介したい(21頁)、というものである。

私にとって興味深いものは、次の三つのことである。まず、後水尾天皇に入内した徳川和子(のちの東福門院)いわば公武合体によって、香道では「一木炷文化はむしろ武家から貴族へと向かう」という流れが形成された、と論じていたことである。この時期の貴族から武家への一方的な文化交流という先入観に対する堀口氏の疑問である。たしかに、茶道の社会では、町人を対象とした千宗旦だけではなく、古田織部・小堀遠州・片桐石舟など大名茶人を創出した時代でもある。武家が文化創造の一翼を担う、まさに「寛永文化」の時代を雄弁に物語っている。

まだこの時期家元制が確立する直前、この混沌とした中で「型」としての文化＝芸道が確立される。素人考えではあるが、おそらく薫物を中心とした香文化では家元制は成立しない。なぜなら、〈香り〉だけでは「型」の文化の成立は難しく、香を炷くこと、香りを聞くこと等の所作が「型」として成立し、それが〈家芸〉として伝承される家元制の確立に繋がることになる。執筆者の一人村田真知子氏が、大名家における香道具の婚礼調度化について議論している。この時期の香文化は、後水尾院や東福門院和子を媒介にして女性宮廷貴族に浸透したことを踏まえ、上層階層において教養から遊芸を含めた芸道＝家芸へと展開する過程でもあったのだろう。

もう一つは、この時代の水戸藩の位置である。本書は、徳川家康、二代将軍秀忠の五女東福門院和子、家康の十一男水戸初代藩主頼房と二代藩主目光圀へと続く武家の香文化の流れを論じていることである。周知のように、光圀はその後の日本史に大きな影響を与える『大日本史』編纂の創始者でもある。執筆者の一人である鈴木健夫氏は「光圀が、京都にもない最初期の「香合(こうあわせ)」の写本を所持していたことが特筆される。「大日本史」の修史事業とも関連すると思われるが・・・」(316頁)としている。その具体的な内容は明らかにされていない。ただ、水戸の香文化は、当時の武家から公家への文化交流の一齣であるとすれば、寛永文化期の中に水戸藩を位置づけるという視点から考えてみるのも楽しいことである。

(評者・もり・けんじ：名誉教授)

堀口　悟・鈴木健夫・村田真知子
『江戸初期の香文化 香がつなぐ文化ネットワーク』
(文学通信) 2020年2月
定価：本体4,500円(税別)

プロジェクト研究助成

周産期母子医療センターにおけるペリネイタル・ロスのケア実態と助産師教育・支援の現状

研 究 期 間：2018～2019年度（２年間）
研究代表者：看護学部・准教授　渋　谷　え　み

【研究の背景と目的】

近年、日本ではハイリスク妊産婦や新生児に高度な医療が適切に提供されるよう、周産期医療の中核となる総合・地域周産期母子医療センターの整備が行われ、一定の成果をあげています。これらの施設では日常的にハイリスク分娩を取り扱い、周産期の死（ペリネイタル・ロス）に対応する場面も少なくありません。ペリネイタル・ロスの概念は、いわゆる死産だけではなく周産期死亡、新生児死亡、そして人工妊娠中絶も含まれます。その件数は18万9千件（厚生労働省, 2019）にものぼり、同年の出生数86万4千件と比べると、ペリネイタル・ロスが決して稀に起こる出来事ではないことが実感できるでしょう。助産師は、分娩ケアと同時にペリネイタル・ロスのケアを行うことを余儀なくされ、葛藤が生じ、バーンアウトも指摘されています。このような状況下で、望ましいケアの普及は未だ十分ではなく、施設間格差も指摘されている現状です。しかし、これらのケアは助産師自身の教育・支援体制が整備されてこそ、望ましいケアへとつながると考えます。

そこで本研究では、全国の総合周産期母子医療センター、地域周産期母子医療センターにおけるペリネイタル・ロスのケア実態とケアにあたる助産師の教育・支援の現状を明らかにすることを目的としました。

【研究の成果】

１）ペリネイタル・ロスのケア実態

全国の周産期センター397施設（2019.4現在）を対象に郵送法による自記式質問紙調査を実施しました。回収は86施設（回収率21.7％、有効回答率100％）、回答施設の2018年度の分娩件数は、平均628±441件、死産数は10±14件でした。

ペリネイタル・ロスのケアマニュアルがある施設は約7割、死児との「面会」「抱っこ」は全ての施設が実施していましたが、退院後、母親らの長く続く悲嘆過程への支援やピアサポート等の連携は不十分な現状でした。また、臨床心理士やリエゾンナースなどの専門家による介入も少なく、他職種との連携強化と継続的な心理的支援の充実が求められました。

２）ペリネイタル・ロスのケアを行う助産師の教育・支援の実態

８割の施設はペリネイタル・ロスに関する不安材料を抱えており、主な理由は、助産師の知識や経験によるケアの格差、助産師の精神的支援まで対応できるエルダー・メンターナースの環境がないことでした。

助産師の教育的支援では、勉強会やカンファレンスが実施されておりケアの質担保の取り組みが伺えました。母親に対する精神的支援などは施設内外で学習や研修の機会がありますが、父親、兄姉など家族に対するケアについては学習の機会は少ない現状でした。ペリネイタル・ロスは、母親だけではなく家族にとっても危機であり、様々な悲嘆症状を呈することが明らかとなっています。家族それぞれの精神面を理解し、ケアに繋がるような学習の機会も必要と考えます。また、胎児や新生児の遺体は大人の遺体と異なり、遺体腐敗予防などの知識とスキルが求められるため、一定のケア基準に沿った学習機会が期待されます。

助産師の精神面に対する支援は、殆どの施設で必要性を認識しているものの組織内での実施率は１割程度であり、プリセプターシップ内での支援に留まっていました。エルダー・メンターナースの支援・育成も含め、ペリネイタル・ロスのケアを行う助産師の支援体制の構築が急務の課題です。

【今後の展望】

本研究は、小野助教、県内外の周産期センターの助産師、助産師教育に関わる教育者、そしてペリネイタル・ロス当事者であるピアサポート（玉響）の吉武氏も共同研究者に加わりディスカッションを重ねる中で、様々な問題提起がなされました。また、事前調査では、本テーマに興味を持つゼミの学生らと周産期センターの助産師にインタビューを行うために福井県まで足を延ばしました。基礎教育では、正常分娩を中心とした看護が主軸ではありますが、ペリネイタル・ロスに関する教育も徐々に定着をしてきました。今後は、基礎教育と現任教育が乖離することなく、現状に沿った助産師の教育・支援体制のモデルケースを立案し介入していきたいと考えています。

なお、本研究結果は第34回日本助産学会学術集会にて発表予定です。

助産師の精神的支援の必要性　有➡84（97.7%）

ケアの重圧感、ストレスによる精神的負担が大きい	23
助産師自身も悲嘆過程をたどるため、思いを表出・共有する場が必要	12
自分のケアを振り返り肯定的フィードバックが互いにできる環境が必要	6
ロスのケアは確立したものがなく、戸惑いながらケアをしている	6
ロスのケアは経験数が少なく、予測できないこともある	3
バーンアウトの原因にもなりうる	3

図１　ペリネイタル・ロスに関わる助産師に対する精神的支援の必要性理由（自由記述）

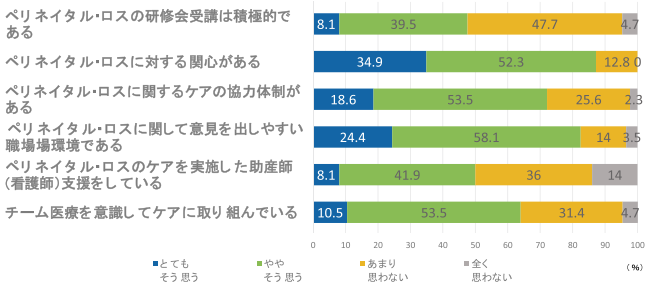


図２　ペリネイタル・ロスに関する施設の状況

（しぶや・えみ：看護学部看護学科・准教授）

コロキアム報告

2019年度 ICコロキアム 活動報告

学術研究センターが主催する講演会「ICコロキアム」では、本学教員が最新の研究や教育の成果を発表し、専門領域が異なる教員間で共有することにより、互いの専門的知識が高まることを目的とし開催しています。

本年度は２件の研究発表を行いました。最初の演題は、本年度までの３年間の研究助成がなされた重点課題研究「地域との協働によるアクティブラーニングを用いた看護基礎教育・新人教育プログラム開発と評価」。看護教育の専門分野における特色のある教育と研究を融合させ、看護師の実践能力向上を目指す内容が伺えました。

もうひとつの研究発表は、心理福祉学科の國見充展先生による「生理指標を用いた認知機能評価プロトコルの開発」。國見先生がこれまでに行ってきた研究の紹介、そして、その研究を認知機能の低下に活用可能な指標の探索・開発を目指すためにおこなっている研究を発表していただきました。当日は、多くの方にご参加いただき、感謝申し上げます。以下に各研究の要旨を掲載いたします。

地域との協働によるアクティブラーニングを用いた看護基礎教育・新人教育プログラム開発と評価

看護学部看護学科　研究代表者　栗原加代
発表者　　中野禎久・原島利恵・松澤明美

本研究は、看護基礎教育課程において、臨地実習施設および指導者と協働した評価可能な教育プログラムを作成し、地域社会のニーズに対応できる看護師を育成することを目的としている。具体的には、基礎看護学、成人看護学、小児看護学の各領域において、地域と協働してシミュレーション教育を推進し、看護基礎教育課程における教育プログラムの作成と評価を行った。

基礎看護学領域では臨地実習指導者と共に同一方向を目指した実習運営を目的とし、基礎看護学実習連絡会議を開催した。その中で、学内シミュレーション実習と病院実習で構成される実習プログラム、実習到達目標ならびにマイルストーンを作成し、2017～2019年度の基礎看護学実習で運用した。実習後にアンケート調査を行い、それらの評価を行った。

成人看護学領域は、看護学部生の卒業到達目標の到達度を学生の自信度から明らかにすることを目的とし、看護学部の４年生に看護技術項目について調査を行った。その結果、技術の経験と自信度に関連があることが明らかとなった。今後は、各技術のタスクトレーニングに加え、技術に自信が持てるような教育プログラムの工夫が必要である。

小児看護学領域では子どもの成長発達を統合する思考を育むことを目的に、地域との協働で演習・実習の新プログラムを開発・実施し、評価した。演習では地域住民参加型のシミュレーション演習プログラム、実習では臨地実習指導者と共に、小児看護のわざを発見・実践するプログラムを実施し、改善策を考案した。今後も学生の体験を重視し、一連のプログラムを洗練させることが課題である。

【2017－2019年度 重点課題研究】

生理指標を用いた認知機能評価プロトコルの開発

生活科学部心理福祉学科　國見　充展

これまでの研究において、脳機能計測(e.g., fMRI；functional magnetic resonance imaging, NIRS；Near-infrared spectroscopy, MEG；Magnetoencephalography, EEG；Electroencephalogram)によって得られたデータ(生理指標)を認知機能低下のバイオマーカに応用する取り組みを行ってきた。その結果、生理指標が認知機能検査に応用し得る可能性がいくつかの先行研究において支持された（e.g., NIRS 研究としてKunimi, 2012, 2013；fMRI研究としてKunimi et al, 2015, 2016；MEG＋EEG研究としてKunimi et al, 2016, 2017)。これらの研究結果は国内外で発表され、認知症の前段階である軽度認知障害(MCI；Mild cognitive impaired)の診断への応用が期待された(例えば、Task-switch課題におけるBOLD信号の交互作用、Kunimi et al, 2016)。不可逆的な進行が認められる認知症の前段階での早期発見は、罹患進行を食い止めるために重要である。

しかし、脳機能計測による認知機能評価の取り組みは、あくまで基礎研究ベースでの成果に留まり、いくつかの理由から実用化への壁は厚い。ここでは生理指標による認知機能評価(将来的なMCI診断法への応用)へのこれまでの取り組みの紹介と実用化への課題、そしてその課題をクリアしようとする現在のプロジェクトについて論じる。

研究倫理教育について

学術研究センターでは、人間や自然、社会現象の究明に対し、グローバルな視点から複眼的・総合的に深く掘り下げ、解決の道が提示できるよう、研究活動と支援に取り組んでいます。また、「研究活動の不正行為への対応ガイドライン」(平成18年科学技術・学術審議会)の趣旨・内容を踏まえ、本学に本務を有して研究活動に従事している者および本学の施設や設備を利用して研究に携わるものを対象として、定期的に倫理規範の修得等を目的とする教育(研究倫理教育)の実施、さらには研究活動における不正行為防止について取り組んでいます。研究倫理に係る講習会の開催や関連する情報発信を行ってまいります。

学術研究センター、この一年

2019年

4月3日(水) 19：00～19：45
第1回 研究倫理に係る講習会
講　師：梶　田　泰　孝氏
(生活科学部・教授)
学術研究センター長
内　容：「茨城キリスト教大学研究倫理指針について」
「研究における不正行為」および「研究費の不正使用」について

9月10日(火) 14：30～15：30
第2回 研究倫理教育講習会
講　師：瀧　澤　利　行氏
(茨城大学大学院教育学研究科・教授)
テーマ：「日常の研究生活の中の研究倫理
ー学術研究の社会的責任ー」

11月2日(土)
学園祭での研究成果発表

2020年

2月21日(金) 12：40～14：00
ICコロキアム 学内研究会
発表1「地域との協働によるアクティブラーニングを用いた看護基礎教育・新人教育プログラム開発と評価」
栗　原　加　代氏
(看護学部看護学科・教授)
中　野　禎　久氏
(看護学部看護学科・准教授)
原　島　利　恵氏
(看護学部看護学科・准教授)
松　澤　明　美氏
(看護学部看護学科・准教授)
【2017ー2019年度重点課題研究】
発表2「生理指標を用いた認知機能評価プロトコルの開発」
國　見　充　展氏
(生活科学部心理福祉学科・講師)

研究倫理教育講習会

ポスター展示

編集後記

Newsletter2019、ようやく発行にこぎつけました。多くの先生方に執筆を担当いただき感謝申し上げます。ICコロキアムの報告や研究助成報告、著書の書評など、皆様の研究活動の活性化に少しでもお役に立てれば幸いです。

2019年度末、新聞やウェブ上は新型コロナウイルス関連情報であふれています。例年、2月・3月は先生方の国内・国外への研究活動が多い時期ですが、中止・延期が相次ぎ、研究活動への影響は必至と推測されます。景気回復や東京オリンピック開催などももちろんですが、やはり研究者としては研究活動の再開のためにも早い終息を願います。

(梶田)

学術研究センターNewsletter Vol.7 2019
発　行　者　茨城キリスト教大学　学術研究センター
発行責任者　梶　田　泰　孝
発　行　日　2020年3月25日
印　　刷　日立高速印刷株式会社